年間特集

思い出の彗星［3］　カコちゃんが教えてくれた彗星

鳴沢真也（兵庫県立大学・西はりま天文台）

「今朝、お兄ちゃんとすいせいを見たんだよ」カコちゃん（仮称）が言いました。
1976年3月6日。
「すいせい？」
　ここは信州の小さな農村。同級生のカコちゃんと学校へ通う道は山の中です。
「明日の朝もきっと見れるよ。東の空を見たらいいと思うよ」
　カコちゃんが言っていたのは、彗星のことなのか、水星のことなのか、私にはわかりませんでしたが、ともかく翌朝早起きして家の外に出てみました。言われたように東の空を望むと、浅間山の上に、なんと雄大な姿の大彗星が出ているではないですか。すでに薄明もかなりすすんでいたと思うのですが、長い尾もはっきりと見えます。それは10才の少年の心を揺さぶるには十分なものでした。言葉にはならない、なんとも神秘的なものを感じました（図1）。

　私たちが見たのは、ウエスト彗星だったのです。文字通り彗星のごとく来て、彗星のごとく去っていったので、天文ファンも見た人が多くなかったことを知ったのは、私が今の職場に採用された後になってからのことです。あれ以来、私はたくさんの彗星を見てきたのですが、ウエストをこえるものには未だにお目にかかっていません。
　中学卒業とともに、カコちゃんとも音信不通になりました。彗星を見るたびにカコちゃんのことを思い出します。風の便りに、オーストラリアに、その後はカリブ海の島に住んでいると聞いていました。イギリス人と結婚したとも聞きました。いつか、あの彗星を見たことが自分の人生に大きな影響を与えたことを報告したいな、とずっと思っていました。

　昨年の秋、私の天文台に一枚の絵ハガキが届きました。イギリスの小さな町からのものでした。差出人の名前をみて、びっくり。それはなんとカコちゃんだったのです。私は、自分たちが見たものが、20世紀で最も美しいと言われているウエスト彗星であったこと、来年は肉眼彗星になると予測されるものが来ること、そして、あの時、通学途中で彗星が見られることを教えてくれたことへのお礼などを書きました。
「36年たってしまいましたが、彗星のことを教えてくれて、ありがとう」
　するとカコちゃんからまた便りがありました。
「長男は、あの時の私たちと同じ年になりました。今度の彗星は息子と見ます。私たちの子どもの頃の話をしながら」
　カコちゃんの住んでいる町は緯度が高いのでパンスターズは難しいそうですが、アイソンの方は、どうか明るくなりますように。そして、イギリスの空の上にも長い尾をひきますように。

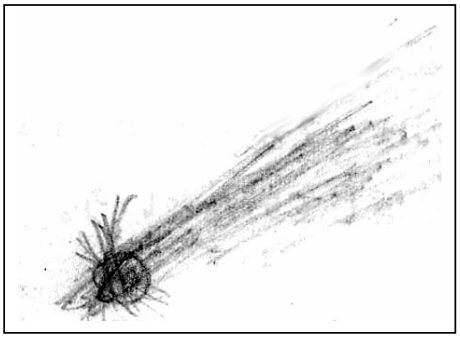

図1　当時小学4年生だった筆者による ウエスト彗星のスケッチ

鳴沢 真也